

今月の谷口雅春先生のお言葉

伝統的な精神にあらわれた日本人のすばらしさ

「大和」という国号にあらわれた日本人の精神性

神話は世界各国にありますけれども、日本にあらわれた神話はやっぱり日本民族の精神を通して宇宙の真理をとらえたのでありますから、同じ真理でもとらえ方において、又その表現の仕方において、作者たる日本民族の個性なるものが現われているので、その神話を研究すると、日本民族の個性や世界観がよくわかるのであります。（中略）

日本民族は総てバラバラに分かれているのを一つに総

合するところの天分を持っているのでありまして、日

本の名前を「大和」と名づけられたということも、

「や」というのは「弥々」と云う字が当てはまるので、

いよいよ多いという意味であります。「ま」というの

は「纏める」という意味であります。弓で射る「的」

を「ま」というのも、同じことでありまして、中心

に「纏まって」いる姿を現わしています。いろいろに分

かれていても、その悉くが一つに纏まるべきものであ

って、決してバラバラのものは存在しない、宇宙は一つ

である、世界は一つであるということのそのその人生観

が、古代の日本民族を通して現在の日本民族に至るま

ですつと貫き通しているところの民族的信念とでもい
うべきものであります。

(新装新版『真理』第3巻239〜241頁)

古来の日本人の衣食住にもあらわれた一体感

日本人の衣食住の様式を観察しますと、(中略)吾々日

本人は一枚の衣ころもで身全体みからだを引包ひきつつんだような着物を着てい
る。是これは全世界を一つに包むと云う全包容ぜんほうりゅう的な国民の使
命が象徴化されているのであります。(中略)『食』じよくの方

面を見ますと、外国人は片手で血の垂たれる肉を切るナイ
フを持ち、片手は手摺てづかみで食そべること其の儘ままを形にあら
わして手の形のフォークで食そべるのであります。茶碗ちやわんに
も蓋ふたがない、天地てんちが揃そろっていないのであります。ところ
が日本人は茶碗にも吸物椀すいものわんにもちゃんと蓋ふたがあり、天地
があり、上下がある、箸はしも天地陰陽いんようを象かたどつた二本の箸はしを
もつて、愛の道かなに協あつた植食物食しよくぶつじよくを主食として神様らし
く人間らしく食たべるのであります。『住』じゆうの方面を観察

しますと、日本人はどの部屋もどの部屋もただ紙一重かみひとえ
の障子しょうじだけで開放的である。西洋人のように各国否いな、各
部屋ぶんど分立して、決して他国いを入いれないと云う風ふうに各部屋かくへや
部屋へやに鍵をかけて置おくなどと云うことがない。全体が一
つの吾わが国だと云う風ふうに各部屋を共通にさせている、日
本人の心の底にはそう云う風ふうに全体が一体だと云う観念
が主流なを為なしているのでありますから、世界も全体を一
つにして纏まとめて統一する国民性を有もっていると云うこと
が出来るのであります。(中略)何なにをしても日本人は、自
他一体感が深く、全体を『一つのもの』として取扱とりあつかう
国民性をもっているのであります。

(黒布表紙版『生命の真相』第6巻54〜55頁)

「愛」とは自他一体の自覚をあらわすこと

日本民族は、人類たがひ互あひに相和あわそうと云う理想をもつて、
国をはじめたのでありまして、「大和やまと」の国号こくごうがそれを
示ししているのであります。(中略)

「人類は互に一つだ」と云う大和の精神が、日本精神でありますから、日本の建国の理想は「愛」だと云うことが出来るのです。「愛」と云うのは、どの人種も、元は一つと云う自他一体の自覚であります。自分と他とは形の上では別々であつても、生命は一体だと云う自覚です。「私はあの人を愛する」と云うことは、あの人と私とは本来一つである。そこで彼の喜びを私の喜びとし、彼の悲しみを私の悲しみと感ずる、これが「愛」であります。それは、或は男女の恋愛のようにも現われ、或は父母親子の愛と云うような関係にも現われ、或は家族が一体であると云う感じの家族愛と云うものになつて現われ、或は国を愛する愛国心ともあらわれ、或は人類を愛する人類愛ともなつて、あらわれます。吾々はこれらの色々の愛を、その内の一つでなく、みなことごとく調和した相で愛し得るように努力するとき、偏つた人間ではなく「全人」としての完全な人間の魂がみがかれるのであります。

(新装新版『真理』第3巻232～233頁)

日本の国を愛してこそ世界の役に立つ

日本に生れた日本人は日本を愛し善くすることによって世界に奉仕し、人類に貢献すべきであります。日本人が日本的であることが、世界のためになるのは、桜の木が桜の花を咲かせることによって人類を喜ばすのと同様であります。国民がその国土に生れて、その国土から恩恵を受け、自分が現在安穩に生活を続けられているのも全て国土のお蔭です。国土の恩と同時に、その国土の開発につぶさに艱苦を嘗めつつ努力して来られた祖先の賜でもあります。此の恩この賜の一切を否定してしまつて、祖国などはどうでも好い、祖先の意志などというものはどうでも好いものだということのように祖国に対して反逆的思想をいだくということは、恩の否定、賜の否定、感謝の否定ということになつて、これは神の道——人の道ではないのであります。

(新編『生命の真相』第6巻96～97頁)